

部会誌『原子力バックエンド研究』の活用を

2014年度バックエンド部会長
塚本政樹

『原子力バックエンド研究』の巻頭言を書かせて頂ける折角の機会なので、20余年になる部会誌の歴史や経緯について記憶の限り振り返り、近年バックエンド分野に関わるようになった部会員の方々にもお伝えすべく、簡単にまとめてみたいと思う。

『原子力バックエンド研究』の前身である『放射性廃棄物研究』の第1巻第1号が発刊されたのは、1994年6月のことである。その2、3年前、大学、研究機関、企業の研究仲間が集って手弁当で研究成果を創出する「テトリス」が発足した。現在ではごく当たり前のこととなった研究連携の走りとも言える活動である。約3年の活動期間中に取りまとめた3件の研究成果は、いずれも身近であった原子力学会誌に投稿した。当時の原子力学会誌は現在のATOMOΣに2、3編の研究論文や技術論文が加わった編集となっており、原子力分野全体の論文を扱うため投稿から掲載までかなりの時間を要していた。「テトリス」のメンバーらは、研究成果をいち早く情報発信できる手立てはないか、について話し合い、『放射性廃棄物研究』なる学術研究誌を放射性廃棄物部会（当時）から部会誌として出版して頂くという提案になったのが発端である。部会に出版小委員会を設置してもらい、初代委員長を故妹尾宗明氏にお願いした。「テトリス」メンバーらが委員に就任し、論文投稿の呼びかけや、自らも投稿することで発刊に至った。徐々に出版体制を整え、第2巻からは早くも特集の企画や、原子力学会企画セッション講演再録の掲載も開始した。『原子力バックエンド研究』と改名した第4巻からは、さらに会議参加記が掲載されはじめた。編集に携わる出版小委員会委員の負担が大きいことが問題となるくらい研究論文の投稿も盛んにあり、バックエンドの専門誌としての役割を十分に担ってきた。その間、研究成果の発信や情報入手の手段として、これら部会誌を活用されてきた部会員も多く居られることだろう。

いつ頃からか、『原子力バックエンド研究』への投稿の勢いが徐々に鈍ってきた。原子力学会誌に和文誌と英文誌が設立されたことも要因の一つとも言えようが、強ちそれだけが原因ではなさそうな気がする。学問分野の栄枯盛衰とまではいかないまでも、研究の進捗につれて新規性に富む学術成果、技術成果の創出が難しくなる傾向はバックエンドの分野に限ったことではない。ただし、そのような状況に甘んずることなく、研究・技術レベルの現状把握と分析による、常に解決すべき課題とそのための研究テーマの発掘の努力を怠らないことは、我々研究者・技術者の義務であろう。論文投稿数が減少する中で、出版小委員会の努力で、研究論文や技術報告の掲載に加え、講演再録や会議参加記が都度掲載されることになり、バックエンド夏期セミナーや国内外の種々の会議に参加できなかった部会員にも、情報が行き届くような工夫がされた。同様なスタイルの会誌は多くあり、1冊（当部会誌の場合はCD-ROM 1枚）に幅広い関連情報がまとめられているという利点がある。また、CD-ROM化もさることながら、大きな改善は部会ホームページでの論文の先行公開である。これにより、査読を通過した投稿論文が部会員および一般の研究者に速やかに伝わるという大きなメリットが生まれた。また、2014年度には発行された部会誌全号のJ-Stageへの登録が完了し、より幅広く認知されることと相成った。部会ホームページへの掲載論文はオープンアクセスの状態にある。過去、特集号以外にも国内外からの英文による投稿が少なからずある。今後英文論文の投稿数が増加すれば、『原子力バックエンド研究』による科学技術コミュニケーションが世界的に格段に拡大すると密かに期待している。

一時期の原子力学会の和文誌や英文誌との統合の提案や、昨今のオープンアクセス誌を含む英文電子ジャーナルの増加により、競争は激化の一途を辿るかもしれない。しかし、競合する類似の雑誌と比較しても、査読の基準やホームページでの先行公開の画期的な仕組みのみならず、掲載論文のレベルも勝りこそすれ決して劣らない。また、2014年秋の大会時での部会員の皆さんへのアンケートでは、読者あるいは投稿者の立場から期待する部会誌のあり方として部会員の皆さんが捉えた魅力や学術誌としての価値の一層の向上など、部会誌を応援する多くのご意見を頂いた。論文賞の設立は改善策の一つとしてすでに具体化した例である。『原子力バックエンド研究』のあり方については、体制強化した出版小委員会や運営小委員会内での議論に留まらず、部会員の皆さん全員がそれぞれの立場での問題意識を持って頂きたく願う。『原子力バックエンド研究』がよりよい学術研究誌であり続けるよう、今後もさらなる発展を望む。

(2015年4月)

